

特 集

胃癌に対する conversion surgery

Stage IVでも治したい！

Conversion surgery については様々な臓器でトピックとなっているが、臓器によって事情は少しずつ異なるようである。胃癌においては、術前化学療法（NAC）後の手術に対し、原則として切除の適応がない転移性胃癌において化学療法が奏効したことで手術の適応が出てくるという形での治療モダリティーの変更を表現し conversion surgery と呼称するのが一般的である。

転移性胃癌という概念の幅は広く、多数の遠隔転移を有する文字通り切除不能な胃癌から、単発の肝転移など技術的に切除は可能な遠隔転移を有する場合、さらには所属リンパ節転移であっても腫大・融合して技術的に切除が困難な場合が想定される。いずれも化学療法の奏効により手術に convert されうるものであるとはいえ、その場合の切除範囲を当初確認されていた病巣のすべてとする場合と、消失した遠隔転移は放置して胃の切除にとどめる場合がある。前者は限りなく NAC 後の外科治療に近い考え方になることから、NAC 症例と conversion 症例は学会等でもしばしば混同して発表されているのが胃癌における実情である。本特集では、この点を整理するとともに、現在の conversion の真の姿に迫りたい。